

目的：近年、成人病発症の若年化が問題となっている。その背景には、食習慣を含めた様々な生活環境が影響すると考えられる。特に大都市における商社員は飲酒の機会が多く健康管理上アルコールに関して栄養指導することが多い。そこで成人病発症の指標の1つとして肥満度を選び、アルコール摂取量と肥満(Ob)・高血圧(HT)・糖尿病(DM)・高脂血症(HL)の有病率との関連について検討した。

方法：都内某大手商社の定期健康診断時に20～69才の男性社員1511名を対象として、食生活等に関する調査を行い、調査用紙はその場で回収した。健康状態の判定は、健康診断時の内科検診および各種検査結果による医師の診断によった。アルコール摂取量は、調査用紙に記入された酒類の平均的な1回摂取量と頻度より、平均1日当たりアルコール摂取量を求めた。肥満度はBMIにより算出した。検査および調査結果の集計と統計的検定はFACOM M-350Rを用い統計処理パッケージANALYSTにより行った。

結果：年齢を10才毎に区分した年代別の有病率は、HT(264名)では20代の3.4%から50代の32.7%へ、DM(117名)では20代の0.6%から50代の15.2%へ、徐々に増加した。HL(101名)では20代の2.0%から40代で10.3%と年代が上がるにつれて増加したものの、50代では10.3%で変わらなかった。Ob(147名)では20代で8.0%が30代で12.4%と有病率が高値を示し、その後は30代と差がなかった。いずれの疾病も年齢による肥満度の差はなかった。アルコールはいずれの疾病においても、40～49才が最も多く摂取していたが、BMIと正相関の強かったものは30代であり、負の相関を示したのはHTの50代とObの20代、50代であった。